二松學舍 松苓会報

CONTENTS

P2 卒業される皆さまへ

P3 第17回二松学舎大学ホームカミングデー

P6 教壇を去られる先生方

松苓会支部情報
北海道支部・岩手県支部・宮城県支部・埼玉県支部・千葉県支部
東京都支部・神奈川県支部・長野県支部・沖縄県支部

P10 同期会情報

P11 大学だより

P13 事務組織の思い出

P14 卒業生だより

P15 会員からの便り

P19 北から南から

P20 学生会員だより

P23 松苓会本部の活動状況　祝　附属高校野球部選抜大会出場

P24 寄付者芳名　編集後記

No.67 2022年3月16日
二松學舍大学同窓会広報誌

90期生の皆さんへ

二松學舍松苓会
会長
廣田　克己

卒業おめでとうございます。

「二松學舍松苓会」（以下、松苓会）は皆さんを歓迎いたします。

皆さんにとってのこの2年は、本当に大変な大学生活でしたね。かつて誰も経験したことのない大学生活を余儀なくされた無念さは、私などには想像することができません。最も大学生活を堪能 できる後半の時期に勉学やサークル活動、交友関係などに大きな支障があったことでしょう。就職活動も大変であったと聞きます。それらの困難や問題を乗り越えて、卒業までに至った努力に敬意を表します。

新型コロナウイルスの感染拡大は、IT革命と重なって、世界中を新しい時代に突入させました。100年に一度とも言われ、従来の考え方や方法が一変するほどの出来事でした。まだ渦中にあって、今後の見通しは不明確ですが、やがて予防と治療という形で私たちの生活の中に定着していくものと思います。

同窓会の長い歴史の中には、同じような経験をし、元気に活躍している先輩たちがいました。先の大戦時に学徒動員で繰り上げ卒業をした方々や、戦時下でまともな学校生活が送れなかった方々です。その学業、学生生活を中断された先輩達が、戦後、大学や同窓会、いや日本を支えてくださいました。

今日のこの貴重な経験を明日からの原動力にしてください。現時点での評価は無用です。評価は長い人生のもっと先のことです。これからあなたがどう生きるのかが問題なのです。その意味で、今がスタートです。

今日から皆さんは都道府県の支部会員であると同時に、「第90期同期会」の会員でもあります。充分に堪能しきれなかった大学生活での先生、同期生、先輩・後輩との交流を、卒業後も続けてください。それが同期会であり、松苓会での活動です。

最後に、今後、松苓会との連絡や同期会、行事などの連絡、案内、また会報の送付は、大学入学時に一人ひとりに配布されたメールアドレスを利用します。大切に保存しておいてください。

どうぞ身体に気をつけて、しなやかに、逞しく生きてください。またお会いしましょう。

卒業生の皆さんへ

二松学舍大学
学長
江藤　茂博

ご卒業、おめでとうございます。

4年間の学部課程を終えられて、これから君たちはそれぞれの道を歩まれます。大学生活で学んだことを生かして、それぞれの生き方に期待と不安のなかで立ち向かわれることでしょう。

学生生活は、これからの人生の序章でしかありません。本編であるこれからの長い道のりには、幾つもの試練とそれにも勝る喜びが待ち受けています。序章だけでは、何もわからないのが人生です。それでも、君たちの人生の序章の一部に二松学舍が登場することは、確かです。そしてその二松学舍での日々をいつか懐かしく楽しめる人生を歩んでほしいと思います。二松学舍が登場する序章とは、ある時は四書五経の言葉かもしれませんし、というのは少し言い過ぎですが、学部での学びや友人との出会いなどでしょう。そうした二松学舍での知識や出来事が、君たちそれぞれの人生の本編をより豊かにするものであってほしいものです。

もちろん、卒業することは学ぶことの終わりではありません。これからも君たちはたくさんのことを学び続けなければなりません。それはまたとても刺激的なことでもあるはずです。大学までの学修で、君たちは学び方を身につけられたと思います。たとえば情報が必要な場合にどうすればよいのか、またその情報はどのような領域のものなのか、こうした知の技法はどのような学びの中にでも基本的なものとして配置されています。二松学舍で手に入れた学び続ける力こそが、この後の、君たちの人生の本編を輝かしいものにすることでしょう。論語の一節「学びて時にこれを習う」です。

そして、二松学舍大学の同窓会組織である松苓会は、人生の本編を歩む君たちが、時々風に吹かれてページが序章に戻ってしまった時のような、懐かしさを運ぶことでしょう。君たちには、ここで一緒に学んだ仲間たちがいるのですから。その一節に続く「朋有り遠方より来たる」を人生の本編で楽しんでください、同窓会組織松苓会を通してのお祝いの言葉にこの孔子の言葉を添えることとします。

第17回 二松学舍大学ホームカミングデー

第17回となる2021年度二松学舍大学ホームカミングデーは、昨年と同様、新型コロナウイルス感染防止の観点から、卒業生をキャンパスに招いての開催を中止し、Web上（本学ホームページ内）に特設ページを開設して実施しました。

ホームカミングデー特設ページでは、江藤茂博学長、廣田克己二松學舍松苓会会長による挨拶文の掲載や、「古き良き二松学舍大学の風景・映像動画」を公開しました。また、特別企画として“Web写真展”も開催。「二松学舍大学にまつわる写真」というテーマで、本学の在校生や卒業生の幅広い年齢層の方から、何気ない二松学舍大学での素敵なワンシーンを数多くお寄せ頂きました。一部本誌上でもお楽しみください。（掲載しきれなかった作品は、ぜひ特設ページよりご覧ください）

ご応募頂きました皆さま、誠にありがとうございました。

二松学舍大学ホームカミングデー実行委員会

◆◆◆「2021 年度二松学舍大学ホームカミングデー特別企画“Web 写真展”誌上公開」◆◆◆

※お名前はニックネームの場合もあります。

二松のアイドル的存在

文学部 / 中国文学科　在学生
まーぶる

文化祭の際に丁度運良く会えたため写真を撮らせて頂きました。皆さんも、この写真で癒されてください～

いりぐち

大学院文学研究科中国学専攻博士後期課程
在学生
楽在其中

2019年2月17日、入口の前で呼吸を整えるため撮った一枚の写真。可能性に溢れる新たな人生を40歳からドキドキスタート。

方谷先生の駅

文学部 / 中国文学科　1991 年度卒業生
ポーちゃん

偉人同様味のある無人駅

頑張れる日

文学部 / 中国文学科　在学生
紫の上

１号館から３号館の移動の際に、長い長い信号を待つか、それとも登り降りはあるが歩道橋を使うか毎回悩みます。けど、元気な日は、歩道橋から見える景色が好きだったので、歩道橋を使っていました。四季によって景色が変わるのが好きです。

二松への道

大学院文学研究科中国学専攻博士後期課程　在学生
悦ノ思い

この写真は数年前のある4月、入学式の日に撮ったものです。新緑の樹木の中に爛漫に咲いているピンクの桜、鏡のような水面に映るその美しい倒影、来日したばかりの留学生の私にとって、初めて見た、そして一生忘れられない光景でした。これに、新入学の喜びと未来への期待が加え、二松学舍大学での新しい始まりという思いが強く感じられました。

空に近い場所

文学部 / 国文学科　在学生
かりんとう

二松学舍大学1号館の13階からの眺め。この景色が大好きで、空きコマは気付くとここにいます。課題が捗ったり、気分をリフレッシュできたり、空の近くにいるといいことがたくさんあるように思います。

書評キャンパス

文学部 / 国文学科　在学生
mi

週刊読書人主催の書評キャンパスに参加してみました。自分の中でとてもいい思い出になったし、書く力が付いたので参加して良かったです。

蜀漢毎天都開心！

文学部 / 中国文学科　1992 年度卒業生
上髙宮あこ

在学中からの宿題「大好きな三国志と、絵と中国語で何かがしたい！」の答えが見つかり始めました。スタンプは日本よりも中華圏でDLが多く、ささやかな喜びです。

センチメンタル・クラスルーム

文学部 / 国文学科　在学生
はう

コロナ禍、会いたい人と気軽に会えなくなってしまったのは大学でも同じでした。偶に訪れる教室で、かつてのにぎわいが過りました。

新しくなった食堂の自販カップ

文学部 / 国文学科　在学生
なつめ

三年前のまだ一年生だった時、温かい飲み物を飲もうと食堂横の自販カップを購入すると、パッケージが冬仕様になっていたのが可愛くて記念に撮った写真です。そんな些細な思い出も、もう戻れない生活の一部だと思うと感慨深いものがあります。早くコロナが収束して、みんなで楽しく食堂でご飯を食べられる日が来ますように。

靖国神社の桜

国際政治経済学部 / 国際経営学科
在学生
みそらーめん

授業の合間に訪れた靖国神社で撮影しました。4月に散歩がてら、大学付近をぶらついて気まぐれに撮りました。

よぢり不動

文学部 / 中国文学科　1991 年度卒業生
海斗

昨年の北海道書道展に出品した作品です。

いつもの交差点の角

国際政治経済学部 / 国際政治経済学科
2017 年度卒業生
421

大学への通学途中、授業の合間の教室移動、その度に4年間毎日見ていたあの曲がり角の風景。先日、閉店されたと聞いてなんだか寂しい気持ちになりました

天晴れ

国際政治経済学部 / 国際政治経済学科
在学生
切り込み隊長

空きコマでの1枚　天気が良く暖かい日は、飲み物を片手に靖国神社で日向ぼっこ　セブンのコーヒーっておいしいな

学生の日常風景

国際政治経済学部 / 国際政治経済学科
在学生
へごへご

これは授業の合間に中洲記念講堂の前で撮った写真になります。2人のボブヘアと大きなハートを作っているのがポイントです。

あの日の授業前

文学部 / 中国文学科　在学生
N3

３年前、授業前にみんなで外を眺めていた時の写真です。二松学舎の窓から見える風景はとても美しく、見ていて飽きません。今はコロナ禍で登校が難しくなってしまってしまいましたが、こうしてまた4人で語り合いたいなあとこの写真を見ていると思います。

光

国際政治経済学部 / 国際経営学科
在学生
コットン

元旦に撮りました。

11 階の階段より

文学部 / 中国文学科　在学生
春安見　長杉

金曜日の昼休みは某教授の研究室に行く役割がありました。最初は渋々でしたが、いつからか一緒に行く仲間が増え、行くことが楽しみになっていました。もう授業は終わり、今後エレベーターで11階のボタンを押すことも減るでしょう。この写真は最後のお迎えの際に撮影した快晴のビル街です。

好（ハオ）！

文学部 / 中国文学科　在学生
四代目 soy 豆腐ブラザーズ

一年生の時に中国文学科を対象にした劇を鑑賞しました。コロナ禍の今では見られない満席の中洲講堂は輝きを放っていました。新入生だった私たちはこの場で親睦を深め、今も仲良くしています。中国語での掛け声「好（ハオ）!」と叫んでいた友達の笑顔は忘れられない宝物です。またみんなで笑い合いながら会話ができる日々が来ることを願っています。

九段坂上

文学部 / 国文学科　在学生
ほたて

九段坂上の信号までは、市ヶ谷ユーザーの人も飯田橋の人も九段下の人もみんな一緒でした。授業終わりやサークル終わりに同じ方向に歩くのが好きでした。この日も特別なことはなくて、私が列の一番後ろにいて、全員写るなと思ったのでなんとなく撮っただけです。楽しかったんだろうなと思います。

北の丸公園の朝

国際政治経済学部 / 国際政治経済学科
在学生
うっきー

対面授業だった頃は、よく北の丸公園に行って、散歩したり、読書したりしていました。行く日、行く時間によって自然は違う表情を見せてくれるので、何度も通った場所でもついカメラを向けてしまいます。

思い出のつまった部室

文学部 / 国文学科　2016 年度卒業生
さるばむ

空き時間にふらっと行っていた部室。いつも誰かがいて、ボードゲームをしたり、雑談したり、たまに現像をしたりと、温かい居場所でした。今はもう無いのかもしれないけれど、またいつか。写真は思いを繋いでくれる。いつかは褪せてしまうけれど、その一瞬を切り取った世界は、いつまでも心に残り続ける。大切な私の宝物です。

二松学舎の付箋

文学部 / 国文学科　1990 年度卒業生
わんがん

最新の大学グッズです。ブック型で4種の付箋が入っています。販売開始していますよ！

大きな鳥居とイチョウ

文学部 / 中国文学科　2015 年度卒業生
郊外に住みたい

一昨年のイチョウがキレイな時期に二松学舎大の近くの靖国神社に行きました。イチョウ並木が有名な外苑前にも行きましたが、靖国神社のほうが人が少なくて良かったです。

教壇を去られる先生方

学び舎「九段」を人生の記憶に

市來津由彦

5年間、二松学舎大学にお世話になりました。その前の東北大学、広島大学も含め、40年余の大学教員生活から離れます。日々昼寝にいそしみ、病気入院といえば盲腸手術くらいで、健康に恵まれたのは幸いでした。

着任3年が過ぎ、本学学生の需要と必要に応じた教育にも慣れ、途絶気味だった研究面に向かおうというときに、コロナ状況の諸問題が始まり、右往左往する中で任期満了となりました。2年に亘るこの状勢でいま思うのは、学び舎が「九段」坂上にあることの、在校生および新卒生、また既卒者にとっての意味です。

オンライン併用授業をすると、日ごろ意識していない部分まで含め、対面授業のしくみを考えさせられます。授業という場は、教員、受講生の協働で成立します。重要なことは、対面授業では「みなが教室にともにいる」ことでこれが実現されることです。教室空間では、講義型やその他の型の授業それぞれのしくみにあわせ身体的にその受講スタイルをとり、居眠りや私語も含め、教師・受講者の全員で身体コミュニケーションを交わしています。抽象的空間であるかのようなその教室は、実は三番町の地名が付いたビルにあり、「九段」のキャンパス名を名のります。教室は九段、靖国、千鳥ヶ淵等と一体的イメージ空間の中にあります。

学部生はおよそ4年間、人生の基礎力を鍛え、苦みも含め学びの体験をこの空間とセットで身体的に記憶します。「九段」はそこでは単なる地名ではない体験記憶になります。

こうした味わいがこの2年、薄くなっているはずです。「学び」は空間的・身体的体験とともに心に刻まれるものと思います。新卒生は1、2年次には多く味わったこの「九段」体験を大切にしていただきたく、在校生は学び舎「九段」を深く味わってほしいと希願します。教室に学生が殆どいなくても画面に楽しく語りかける、私にはそれが近2年の「九段」でしたが、飯田橋から靖国を過ぎり、大村益次郎の手の双眼鏡は上野が見えるのかなどと思いを馳せ、それなりに楽しんでおりました。

最後に、支えてくださった多くの方々、特に、教育面で厳しく鍛えてくれたこれまでのすべての受講学生に、心より感謝申しあげます。

（東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）。東北大学大学院国際文化研究科、広島大学大学院文学研究科等を経て、二松学舎大学特別招聘教授）

松苓会支部情報

（今号も、支部の状況などを支部長に自由にご執筆いただきました。）

北海道支部

寒さもコロナも乗り越えて

事務局長　若松顕仁

昨年も、新型コロナに振り回された年でした。支部総会も書面決議での実施を余儀なくされ、道東・道南・道北の分会総会も開催できませんでした。そして年明け矢先のオミクロン株。新年会も中止せざるを得ませんでした。支部会員の皆さんと顔を合わせる日が何時になるのか、見通しのきかない、まるでホワイトアウトの吹雪の中にいるようです。

私の地域では今年も流氷がやって来ました。この時期、北海道では気温が終日マイナスの日が続きます。マイナス20度以下という日もあります。眉も睫毛も凍ります。加えて連日の大雪で、除雪に追われる日が続きます。マスクしながらの雪かきは、息も腰もやられます。

しかしこの寒さと雪を乗り越えたら、必ず春が訪れます。暖かい日差しが氷を溶かし、草木が芽生えます。経済も息を吹き返し、支部活動も再開できるようになるでしょう。その日を心から待ち望み、極寒の毎日を耐えましょう。今年こそ！　今年こそ！　今年こそ！

◆支部報発行

○第63号　令和3年8月6日発行
・支部会員の異動
・会費の納入状況について
・大学トピックス
・支部総会を「書面決議」で行います。
・会費納入に特段のご協力を

○第64号　令和3年12月25日発行
・分会総会および支部新年会2年連続中止のお知らせ
・会費納入に特段のご協力を
・事務局より
・訃報　佐藤新平様
（令和3年12月23日逝去　27文）
・書籍の紹介『渋沢栄一と二松学舎』
・令和3年度支部予算案（訂正版）

岩手県支部

会報作りで思うこと

支部長　宮本義孝

県支部会報の発行は、昨年末で99号になりました。年度内で百号までゆきそうです。

私が支部長になった時、会員に、総会開催だけでなく、会報も出してほしい、と言われました。会費をいただいているので要望に応えるのは当然ですが、問題がありました。

本部からの助成金は3万円が上限

で、これだと1回作るのがせいぜいです。それでいろいろ考えた末、会報は手書きにしました。これなら5回ほど出せそうです。その上で、途中で投げ出さないよう、特別号の外、年4回の発行を自分に義務づけました。

そして、今もそれを守っています。

会報の多くは、駄文、雑文です。それでも、東日本大震災時の報告や牟岐詰雄・千葉仁先輩の漢詩の編集、萩谷朴・佐佐木鍾三郎先生の思い出、略伝など、少しは納得出来るものもあります。

私は、本来、怠者だから、そのままなら恐らく何も書き残さなかったでしょう。支部長も会報作りも自ら望んだものではないけれど、結果的には、かかる立場に立たされたから出来たのだと思います。

それから会報作りを通してもう一つ、人は仕事を共にすることによって人と結ばれる、ということを感じました。

初め仕事は私一人でやっていましたが、今は小笠原克夫君が進んで校正やコピー、それを綴ったり冊子に仕立てたりしてくれています。

そして会報が仕上がれば、それを通して会員同士の心の繋がりも広がるようで、必ず感想を寄せてくださる方や、また、支部長をしていれば持ち出しもあろうかと、会費に足して余分に送金なさってくださる会員もいて、大変に励まされています。

私も傘寿を過ぎ体も動かなくなりましたが、次の担い手が現れるまで、もう少し、皆に支えられてがんばろうかと思っています。

◆支部報発行

○第99号　令和3年11月9日発行

・盛岡文学散歩

北山散策路と立原道造

宮城県支部

支部情報

支部長　二上久芳

〔一〕第68回河北書道展において田代ひとみ（明眸）さん（44文）が、第6部篆刻・刻字部門において刻字「順逆一視」で委嘱作家特別賞を受賞いたしました。

〔二〕令和3年11月15日、島倉尚子さん（修士2006年3月修了）が勤務校において「低学年からの小論文指導―情報を共有し各々の意見を述べる」のテーマで研究授業を行いました。左に本人の感想文を紹介いたします。

「仙台育英学園高等学校多賀城校舎フレックスコース1学年と3学年の学校設定科目で、基礎小論文・受験小論文を担当しております。授業時間の都合により、今回は自分の担任のクラス（1年生）での研究授業となりました。

今の子供たちの多くが「検索する」「調べる」ことについては日常的になったものの、それを学習の面に活かすという事については今一つではないかと感じていました。今年度入学の1学年からchromebookを一人一台導入し授業での活用を推奨していますが、教員側も試行錯誤しながらの授業を行っています。導入したものの授業での活用はごく限られた場面のみという事もあり、研究授業前に行った予行演習では教員側が考えていたような意見が出ず、どうにも上手くいかなかった面も多々ありました。新聞記事を活用し、自分自身がどのようにその事柄に対して考えたかという事に対して意見を出させるという内容の授業を行いましたが、Zoomに接続させチャット機能を活用して意見を可視化させるという事を行いました。

まだまだ発想が幼かったり、思ったことを端的にまとめられなかったりという課題点は多くありますが、今回の研究授業の趣旨である「低学年からの小論文指導」という内容については達成できたのではないかと感じました。」

◆支部報発行

○令和4年1月1日号

・あけましておめでとうございます

支部長　二上久芳

・支部会員の近況報告　13人

・令和3年会計報告

埼玉県支部

変化への対応

支部長　青木一弥

昨年11月初旬のこと。全国的に新型コロナウイルスの感染率が低下し、このまま終息に向かってくれれば、2年間自粛していた松苓会支部活動を再開できると思っていたが、それも束の間。年末には、さらに感染率の高いオミクロン株の世界的流行によって、年明けから埼玉県においても過去最高の感染者数を日々更新し、現在においては、蔓延防止重点措置が発令される状況に戻ってしまった。

この2年間、学校教育のあり方も大きく変化したと聞く。オンライン授業や分散登校による感染防止はもとより、黙食での給食が当たり前となり、学校行事や部活動は中止や規模が縮小されるなど「楽しくウキウ

キ」するはずの学校生活に暗い影を落とした。教職を卒業した身にとっては、案ずるのみであるが、現職の先生方の苦労は察するに余りある。まして、今回の第6波は、幼児や青少年の感染が増加し、各学校においては、新たな対策が必要とされている。

変化に対応していくには、先見性や決断・実行力が不可欠であるが、教職員にとっても、また、各方面で活躍されている二松學舍出身の皆様にとっても、どうか、コロナ禍での貴重な体験を必ずやってくる感染終息後の生活に活かして欲しい。

さて、3年目に突入したコロナ感染の状況だが、支部活動においても、現状に対応した変化が必要か。現会員の活動と共に、新会員の加入も含め、一歩踏み出さなければならない時に来ている。

千葉県支部

新型コロナ禍であったから

支部長　河野千津子

平成31年（2019年）3月31日、九十九里高校を最後に定年退職をしてもうじき丸3年になります。

退職して10か月経った頃から新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい続け、一時収束に向かったかと思いきや今度はオミクロン株が急速な勢いで蔓延し今もなお社会情勢に大きな影響を及ぼしています。

私自身、行動のしかたや行動範囲は制限されましたが、日々の生活においては別の意味で大きな変動、収穫、発見がありました。14年間在宅介護の義母が他界し、介護に要していた時間を家事や趣味の時間に使えるようになりました。退職直後から夫と一緒に始めた断捨離。昭和20年代から蓄積していたであろう納戸や物置に押し込まれた大量の物品処理。そのうちおよそ6割が新品。心が痛みましたが、いずれやらねばとの思いで目をつぶりました。品々の行き先は、不用品買取業者、もらってくれる知人、ゴミ処理場でした。ほぼ毎日2、3時間ぐらいの作業で6月末まで続きました。新型コロナのおかげで、だいぶ片がつきました。空間が広がると気持ちもゆったりし、何とも心地よい時を送れているように感じます。

庭の草取りもこれまでは鎌を使って根っこから取ることにこだわっていましたが、なかなかハカが行かず、ついに充電式草刈機を買い求めることにしました。ネットで検索をしたり、販売店舗を数軒歩き回って専門家の話を聞いたり、手にとって重さの感覚を確かめたり、そんな時間も楽しいものでした。これまで興味関心のなかったことに気持ちが向き始めると、新たな世界がぐんと広がったようでワクワクしてきます。とにかく短時間で効率よく事が進むことに改めて感動しています。物置の奥から義父が買ったであろう小型の電動式生垣バリカンも発見。数回使って20年以上箱にしまわれたままの状態。気になる枝葉をあちこち気の済むまま刈ってしまい大虎刈りに。夫が大事にしていたという円錐形の五葉松まで無残な姿にしてしまい呆れられる始末。このような話を聞いてくれた中学時代からの友人は、若い頃御主人に先立たれ、今でも週3日仕事のかたわら、山や広い田畑の管理をひとりでやってのけています。この道28年。彼女は、用途に応じた草刈機やチェンソーを操っているようで、ままごと遊びのような私の話を大笑いしながら受け止めてくれました。これ以来妙に庭木のボサボサが気になり、思いつくまま手入れのまねごとをしています。

家事に平行して趣味の時間も多くなりました。毎年行われている書の展覧会もしばらく開催中止が続きましたが、感染防止対策をしながらまた発表の機会が増えてきたことをうれしく思っています。世の中コロナの話題は途切れず重く暗いニュースの多い毎日。せめて気持ちが明るく前向きになるような題材をテーマに作品制作をしています。

終息の見えない新型コロナウイルスの影響で、生き方を考える3年となりました。人生百年時代！　何はともあれ健康が第一。健康寿命を延ばしたく女性専科の体操教室「カーブス」に通い「貯筋」の毎日。今まで気がつかなかった日常のありがたさに感謝をしつつ、これからも健康で毎日を丁寧に紡いでいきたいと思っています。

支部情報

令和3年度の支部総会及び講演会、文学散歩も昨年同様新型コロナウイルス感染症感染防止のため、やむなく中止といたしました。偶数月の最終日曜日を役員会として開催を待つばかりまでの準備を進めてまいりましたが、参加予定の皆様の安心・安全を第一と考えました。令和4年度に期日を新たに定め、内容についてはそのまま実施したいと考えております。

東京都支部

支部情報

支部長　矢澤喜成

新型コロナウイルス感染の終熄が見えぬ中にあって、東京都支部では、令和2年度に引き続き、令和3年度も、支部総会・講演会・懇親会、文学・歴史散歩等の行事を全て延期（中止）致しました。今年度こそはと、役員一同企画を練っている所ですが、如何せんまたしても予断を許さぬ状況になって参りました。この2年間、役員一同の一致協力の下、年2回の支部報の発行と、その内容の充実に全力を注いで参りました。

◆支部報発行

○第71号　令和4年1月1日発行

・年頭所感　矢澤喜成
・生命の海から　井上和男
・繋ぎて伝統となすこと　畠山幸治
・人を育てるということ　星野優子
・ゆく年くる年　丑から寅へ　大山由美子
・武道教育を巡る私感―表面調和と心身の揺れ　奈佐有記
・矜持なきは去れ　中洲の原点　片山聖英
・旧山縣有朋邸・覗き見日記　大渕俊明
・私の嗜み・私の悦び　神河秀春
・史上初、東京ドームでの決勝戦　渡辺大雄
・合縁奇縁シリーズ①　縁の中に生きて　砂子澤敏子
・子を得て学ぶ親の恩　中原敬二
・監督の座右の銘は「雪中松柏」　髙柳幸雄
・「新しい始まり」　荒屋陽子
・東京支部事務局から　中原敬二
・編集後記　片山聖英

神奈川県支部

コロナ禍で続く事業中止と今後の支部運営

支部長　平野光治

ウイズコロナによる新しい生活様式により生活のみならず精神面においても不自由さを感じる日々となっています。神奈川県支部事業が『会計監査』と『支部報発行』のみとなって2年が経過しました。「今年こそは」と考えておりましたが、オミクロン株の猛威によりフルスペックの事業実施に不安が残る事態となりました。

支部運営につきましては会員や会費納入者の減少により事業実施費用の不足が生じています。『総会』『文学歴史探訪』『賀詞交歓会』『支部報発行』事業を実施していますが、毎年の赤字を考えると事業の見直しが必要となっています。本部からの『助成費』は大変助かってはいるものの過去からの繰越金に頼っている状況は支部の存続の危機にも繋がっています。

近年、創設以来支部を支えていただきました役員様のご逝去によりますます不安がつのっております。一方で、そのご尽力に感謝し、「支部の存続に向けて努力しなければならない」との思いを強くしています。幸いに近県の支部との交流が出来るようになり、本部や近県支部のご協力により、合同の事業として『東京都支部、神奈川県支部合同講演会』（平成29年度）『三島中洲師墓参・紅葉・バスツアー』（本部、東京都支部、静岡県支部、神奈川県支部　平成29年度）『夏目漱石アンドロイド講演会並びに懇親会』（東京都支部、千葉県支部、神奈川県支部、群馬県支部ご参加　令和元年度）を実施することが出来ました。近県各支部の事業に神奈川県支部会員が希望により参加できる環境作りをしたいと考えております。そのために会員への広報手段の拡大、工夫に取り組んでいきたいと思います。近県支部会員相互の交流を目標に努力してまいります。

今後も本部、近県支部並びに二松學舍松苓会の皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

◆支部報発行

○第41号　令和3年10月10日発行
・明珠在掌（みょうじゅ　たなごころにあり）　渡邊慈江
※本号19ページに転載。
・令和2年度決算・令和3年度予算案
・令和2年度事業報告・3年度事業計画
・ご了承、承認のお願い
・本部の状況と支部のリモート会議
・コロナ禍の日々
・訃報　浅居美智子様（令和2年10月逝去　33文）
中川俊一郎様（令和3年1月3日逝去　43文）

長野県支部

三島中洲先生と記念碑について

支部長　清水　登

『三郷村の碑文』（三郷村教育委員会・昭和63年）に、明治17年に建立とされる務台（むたい）伴語筆塚（務台翁寿蔵碑・所在地　現在の安曇野市三郷温《ゆたか》野沢向街道）が紹介されており、その碑表の撰文は従五位三島毅、中根聞書並びに隷額とあります。撰文の内容は、翁（文化11年～明治20年）の経歴を紹介し、その業績を顕彰したもの。同書によると、寿蔵碑は生きているうちに建てておく碑のこと。翁名は景貞（かげさだ）、伴語と称し、俳句に堪能で、若い時から家塾をひらき、門弟は近郷及び豊科、松本その他各地から多く集まり、地方文化の先駆的役割を担った。塾は温知学館と称したとあります。

『小諸碑文集』（小諸小学校職員研究会郷土史員　代表堀米秀春・昭和4年）に、明治36年建立（中山翁門生一同による）とされる中山貞邦翁碑（所在地　小諸市懐古園前）が紹介されており、従二位勲一等子爵渡辺国武篆書、東宮侍講正五位勲四等三島毅撰文（明治31年）、勅撰議員正四位勲三等巌谷修書とあります。『小諸市誌　歴史篇（3）』（小諸市誌編纂委員会・平成3年）によると、中山貞邦（文化8年～明治25年）は、軍蔵、慎蔵と称し、直心影流師範、道場、詩文に長じた武人とあります。

三島中洲先生撰文の伊沢修二先生記念碑（現所在地　伊那市高遠伊沢

修二生家）の建立時期について、河南小学校の大正9年の日誌に5月26日、建碑除幕式参列のため引率とする記載が確認され、それまで定説とされてきた大正8年5月が変更されることになったとする報告（矢野路雄「伊沢修二先生頌徳歌」『伊那路』第369号・上伊那土研究会・昭和62年）があり、『伊沢修二―その生涯と業績―』（高遠町図書館・昭和62年）における記念碑建立の記述は、このような郷土史に関する調査結果を踏まえたものと思われます。

※写真は小諸市懐古園前の中山貞邦翁碑です。

沖縄県支部

復帰50年今も変わらぬ沖縄の現状

支部長　金城健一

明治10年創立、145年の歴史を誇る我が母校「二松學舍大学」、私が入学したのは昭和41年の春でした。入学式の日、今は亡きお袋と歩いた「千鳥ヶ淵」の桜が美しかった事を、今も鮮明に覚えています。沖縄の復帰50年の節目の年に何か書いてくれ、との事務局から依頼が有りましたので、50余年前の記憶をたどりつつ、ペンを執りました。二松入学の一年前に、都内某私立大を中途退学し、沖縄に帰り、悶々としている時に、二松出身の、高校の教頭に呼ばれて諭されたのが「二松學舍大学」への受験でした。大学生活は教頭の期待を裏切る「波乱万丈」の4年間でした。下宿から渋谷・広尾の牛乳屋に通い、早朝の牛乳配達で始まった私の東京生活でしたが、初めて迎えた雪の降る朝、路面電車の線路に単車のタイヤをとられ横転、当時の瓶詰め牛乳を全部割ってしまい、即刻「牛乳屋」を首になりました。下宿代を払えず途方にくれて居る時、二食付き四千円の格安の県の「学生寮」を紹介してくれたのも、その先輩でした。

昭和47年の沖縄返還前で、学生寮の仲間達は連日「沖縄返還」と叫けび、新宿・お茶の水の駅頭に出ていました。おのずと私もその渦中に入って居たような気がします。大学の教養の単位取得のメドがついた頃から、ほとんど授業に出ず、二松の多くの学友が出席の「代返」で私の卒業に力を貸してくれました。

学友達の友情のお陰?で、「与論島」からの「海上集会」に参加する事も出来ました。

50余年後の今も二松の学友達との深い絆は続いています。さて沖縄復帰から50年後の今、沖縄の現状はどう変わったのでしょうか?確かに今の子供や孫たちは、パスポート無しで、本土との行き来が自由になりました。インフラも整備されました。しかし政治の実態は、「辺野古新基地建設」に見られるように、50年後の今も何も変わって居ません。

一日も早く、コロナ禍が収束し、二松の学友や、松苓会の皆様ともお会いしたいと願う今日この頃です。

沖縄が本土から切り離されたのは、昭和27年4月28日、日本国と連合国との間に結ばれた「サンフランシスコ条約」の第3条、「北緯27度以南の南西諸島を合衆国を唯一の施政権者とするアメリカの統治下に置かれた。

あれ以来、4月28日を「屈辱の日」として、与論島と沖縄本島の中間点、北緯27度の線上で、「4・28海上集合」が開かれて来た。写真は、昭和43年の集会に東京都代表で、鹿児島港から船に乗り込んだ時の筆者（右から二人目のヒゲの男）である。後方に「桜島」が撮っている。

同期会情報

88期・89期同期会幹事会延期

令和3年の定期総会で松苓会会則の改正が行われ同期会組織が会則に位置づけられました。

令和元年度、令和2年度卒業の第88期、第89期同期会のその後の状況をお知らせします。

第88期同期会

令和2年2月22日に、同期会結成説明会が開かれ、「第88期同期会運営要領（暫定）」を承認し、同期会を結成致しました。同時に同期会幹事16人を選出。5年後に最初の同期会開催を目標に掲げ、活動していくこととしました。ところが、この年から猛威を振るって現在に至っているコロナ禍の為、当初予定した幹事会を開催出来ずにおります。昨年11月頃、コロナ禍が一時落ち着いたこともあり、本年1月29日に幹事会開催を企画しましたが、新年に入りオミクロン株の第6波に見舞われ、まん延防止措置の発令となり、やむなく幹事会中止（延期）の措置を執らせていただきました。今後は、コロナ禍の状況を見ながら企画していくことになります。

第89期同期会

89期卒業生（令和3年3月卒）は、コロナ禍により、大学内での同期会結成説明会の開催が出来ませんでした。卒業時配布の資料により、同期会の結成、同期会幹事募集を周知し、88期同期会と同日（1月29日）に幹事会開催を予定致しましたが、コロナ禍により開催できず、他日に開催することと致しました。

同期会幹事は継続して募集中です。松苓会本部に問い合わせください。

同期会運営を担う幹事会の開催は、幹事相互の親睦、交流を目指すのが当面の目標です。この趣旨を達成するためにもコロナ禍の一日も早い収束を願ってやみません。

大学だより

創立145周年記念事業

学校法人二松学舍理事・事務局長
小町邦明（49文）

二松学舍は、本年創立145周年を迎えます。これに伴い、二松学舍創立145周年記念事業準備委員会（以下準備委員会）が、五十嵐清常任理事を委員長として、2021年4月13日発足しました。その後、2回の委員会を重ね、基本方針及び事業予定について概ね次のような計画が策定されました。

先ず、準備委員会では次の3つの基本方針に従い計画を実施していくことを確認しました。

①記念式典・祝賀会は10年ごとの行事とし今回は実施しない

②二松学舍のブランド力向上を目指した広報活動の実施

③記念募金活動の実施

次に、この基本方針に伴う具体的な計画については、各学校で、それぞれ予算取りを含めて進めていくことを決定しました。

法人・大学では、ブランド力向上のための広報活動として次のような事業が計画されました。

○ホームページのリニューアル
○145周年特設サイトの制作
○145周年動画の制作
○145周年ロゴマークの作成（済）
○「明治10年からの大学ノート145周年版」の発行
○九段大学1号館、内堀通り側柱に145周年シートの巻き付け
○『「論語と算盤」二松学舍と渋沢栄一』の出版（済）
○「都心で学ぼう」続編の出版
○創立記念碑を九段1号館前石垣付近に設置
○著名人による子供研究会の開催（柏キャンパス）

この他、学内で開催されるシンポジウムについても145周年の冠をつけた事業として実施していくことが決定しました。

附属高等学校では、「論語の一斉授業」の実施を予定し、附属柏中学・高等学校では、「スクールバス車体に創立145周年記念ラッピング」等の実施が計画されています。さらに両附属高校とも「ホームページのリニューアル」、「ブランドイメージ動画」の作成など実施していく計画となっています。

募金活動については、本年6月に145周年記念募金（教育研究振興資金）のお願いを松苓会員の皆様にも、お届けする予定です。（下段）

二松学舍大学は2022年4月に文学部に「歴史文化学科」・大学院に「国際日本学研究科」の新設、文学部都市文化デザイン学科に「外国人留学生3年次編入学特別増員枠」を設けることで60人の定員増が認められ、大学の収容定員は2780人に拡大します。また、2021年度入学生から学生一人一人にパソコン1台の配布を始め、それに対応するため、ネットワーク環境を、年次計画で高速化・大容量化していきます。さらに、これを契機として、質の高い教育手法の開発を進め、「学修者本位の教育」、「学びの質の向上」、「就職先の保証」に資する環境整備のため、DX（デジタル・トランス・フォーメーション）部会を立ち上げ、推進していくこととといたしました。

この他、施設設備についても、校舎、グラウンドの整備や教育研究環境の整備など、将来を見据えた事業を推進していくこととしており、これには財政基盤の充実と強化が必要となります。

松苓会員の皆様には度重なるお願いとなり誠に恐縮ではございますが、教育研究環境の一層の充実及び二松学舍のさらなる発展のために何卒ご理解いただき、145周年記念募金にご支援・ご協力賜りたくお願い申し上げます。

最後に私事ですが、私自身が二松学舍大学に入学した年が、丁度100周年の年で、当時は100周年に特別な感情を抱きませんでしたが、その後も二松学舍は年月を重ね、こうして145周年を迎えることは卒業生として感慨深く、改めて気の引き締まる思いがいたします。今後も松苓会員の皆様には、引き続きご支援、ご協力賜りたくよろしくお願い申し上げます。

二松学舍創立 145 周年記念募金要項

1．募集期間　：
2021 年 12 月から 2024 年 3 月末まで

2．受付金額　：
個人 1 口 5,000 円、企業・法人 1 口 50,000 円
＊なるべく 2 口以上のご寄付をお願いしておりますが、上記金額未満の寄付もありがたくお受けいたします。

3．募金の用途　：
お申込み時に、以下の用途からご指定ください。
①大学の教育研究環境整備
②附属高等学校の教育環境整備
③附属柏高等学校の教育環境整備
④附属柏中学校の教育環境整備
⑤学生・生徒の奨学金の基金
⑥被災学生・経済的困窮学生への支援
⑦用途を指定しない

4．寄付方法　：
①インターネットを利用した寄付
右の QR コードを読み取り、「お申込み方法はこちら」からお手続きしてください。
②金融機関窓口での振込による寄付
本年 6 月に募集要項を送付しますので、同封の振込用紙をご利用ください。

その他、ご不明のことがあれば下記担当までご連絡ください。
お問い合わせ：企画・財務課　（電話）03-3261-1298

大学九段 1 号館前に設置される創立記念碑

著書紹介

荒井裕樹著
『まとまらない言葉を生きる』
（柏書房）
（2021年5月25日第1刷発行）
定価1800円＋税

全18話からなるエッセイである。どこから読み進めてもいい。

「被抑圧者の自己表現」を専門とする著者の新刊だが、単に差別反対を叫ぶ書とは趣が違う。

ハンセン病患者の言葉、水俣病の闘い、ウーマンリブの運動、府中療育センター闘争、川崎市登戸の無差別通り魔事件、京都アニメーション放火殺人事件、私大医学部入試の得点操作、介護現場の難問、子供を保育園に入れるための活動などを介して、著者が若い頃から関わりを持ってきた人たちの、力ある「言葉」を紹介している。

戦時下の「非国民」という罵りや「贅沢は敵だ」のスローガンにも触れて、2010年代以降に目につくようになった、憎悪・侮蔑・暴力・差別に加担する言葉に危機感を抱く。日々の生活の場でも政治の場でも、分断や対立を煽る言葉・卑近な嫌悪感が卑俗な正義感をまとっているだけの言葉に溢れているとする。

人の心を削る言葉、負の力に満ちた言葉の増加への危惧が一巻を貫いている。言葉への信頼を壊すような発言を危ぶみ、「自分で自分を殺さないための言葉」こそ大切と記す。

紹介される「黙らなかった人たち」の言葉に、筆者の眼差しと思索が与えられて、言葉の魂、尊さ、優しさといったポジティブな力が読者の胸に迫ってくる。

「昨今、言葉が壊されてきた」のは何故か？「生きづらさを抱えた人」を黙らせる圧力とは何なのか？「正しい・立派・役に立つ」とは誰が作った価値観なのか？「差別によって損なわれたもの」とは何か？読者がやんわりとしたサゼッションを得られる一冊である。

本書は、「朝日新聞」2021年10月13日夕刊で、「こぼれた表現にこそ宿る力」「降り積もり浸透し新しい思考開く」と紹介された。同紙「折々のことば2021・10・30」でも鷲田清一氏が引用した。2022年1月12日から著者は、同紙文化欄に、「荒井裕樹の生きてゆく言葉」と題するエッセイを隔週水曜日に連載中である。

著者の荒井裕樹准教授は、本『まとまらない言葉を生きる』巻末で次のように紹介されている。

荒井裕樹（あらい・ゆうき）
1980年東京都生まれ。二松學舍大学文学部准教授。専門は障害者文化論、日本近現代文学。東京大学大学院人文社会系研究科修了。博士（文学）。著書に『隔離の文学――ハンセン病療養所の自己表現史』（書肆アルス）、『障害と文学――「しののめ」から「青い芝の会」へ』（現代書館）、『生きていく絵――アートが人を〈癒す〉とき』（亜紀書房）、『障害者差別を問いなおす』（筑摩書房）、『車椅子の横に立つ人――障害から見つめる「生きにくさ」』（青土社）などがある。

対談集に、『どうして、もっと怒らないの？――生きづらい「いま」を生き延びる術は障害者運動が教えてくれる』（現代書館）がある。

〈小林公雄（38文）〉

2021年度　「『論語の学校 -RONGO ACADEMIA-』動画公開のご案内

「『論語』の学校」は、コロナ禍のため昨年度は中止になりましたが、今年度はYouTube公式チャンネルで動画公開という形で実施することになりました。

「渋沢栄一『論語と算盤』と現代の経済や経営」を切り口とした本学学生を対象とした特別講演を始め、二松学舎大学のご紹介もしております。この機会にぜひ、お気軽にご覧いただければ幸いです。

〈プログラム（一部紹介）〉
◇特別講演①：「『論語と算盤』と信用金庫経営」
　かながわ信用金庫　理事長　平松　廣司（ひろし）氏
◇特別講演②：経済学と倫理学：現代経済学から見る『論語と算盤』」
　本学国際政治経済学部　岩田　幸訓　教授

ＵＲＬ：http://www.nishogakusha-u.ac.jp/news/?contents_id=2037
配信期間：2021年12月27日～2022年12月末日　＊無料
問合せ先：学校法人二松学舎　企画・財務課
rongogak@nishogakusha-u.ac.jp

動画は以下のページまたは右のＱＲコードよりアクセスしてご覧下さい。

事務組織の思い出

二松学舎大学のICT部門の変遷・情報センターについて

増田光司（60文）

二松学舎大学に「情報センター」という部署が存在したのは、平成11（1999）年度から平成30（2018）年度であり、創立145周年を迎える二松学舎の歴史の中では、僅か20年間でしかない。私が学生であった当時は、情報センターはおろか、PC教室もない時代であった。この会報を受け取っている多くの卒業生にとっても、この部署を契機に学生時代への郷愁を覚える方は多くないであろうと思う。

このような私に、今回、松苓会事務局から情報センターについての寄稿依頼があったのは、大学職員として入職した後、情報センター管理室長を6年ほど務めた縁によるものとのことであった。着任初年度は、平成19（2007）年であったと記憶しているので、情報センター史の中でちょうど中間期に関わっていたことになる。

情報センターは、1999年に沼南校舎（現、柏キャンパス）1号館に設置され、発足に際し初代センター長の福井実国際政治経済学部教授が尽力されたと聞いている。また、初代の室長は、井上和男就職部長が兼務で執務をとられていた。当時の私は沼南校舎で別部署に勤務していたが、近い将来情報センターに関わることになるとは思いも寄らなかった。

私が着任した平成19（2007）年度は、岩崎愛一国際政治経済学部教授が2005年から第5代のセンター長に就任されていて2年間をご一緒し、次に山口直孝文学部教授が第6代センター長として着任され、平成24（2012）年度までの4年間業務にあたりご指導をいただいた。私が管理室長を務めた約6年間、情報センターを無事に運営できたのは両先生のご協力があったからであり、この場を借りあらためて御礼申し上げたい。

日本でのインターネット普及を少し振り返ってみると、1980年代には本格運用されており、1987年に、学術情報センター（NACSIS、現:国立情報学研究所）により、研究組織間における学術情報の提供を目的として、学術情報ネットワーク（NACSISネットワーク）の運用が開始された。このネットワークは後にSINETと名称を変えて発展し、二松学舎大学も情報センター開設に合わせて、このSINETに接続しインターネット利用を開始した。当時の一般用通信インフラは電話回線を使用していたため、通信速度等に制限があり、またプロバイダ契約も必要であったが、このSINETを利用できることで本学の教育研究環境は大きく向上したといえる。

情報センター発足時点では、沼南校舎にのみPC教室がある状況であったが、九段キャンパスに新校舎が竣工した2004年には、PC教室は九段キャンパスに3つ、柏キャンパスには4つを配置し授業等に活用されていた。

情報センターの主要な業務としては、これらパソコン教室と大学内のパソコンからインターネットに接続する通信回線の管理運用と保守があった。現代では無線LANや5Gなど通信回線技術革新や、スマートフォンやダブレットPCが身近にものになっているが、情報センターが開設された時代はまだ光回線も高価で、インフラ整備やパソコン設備にも高額な費用が必要とされていた。そのため、国からの補助金制度が設けられており、各大学はこの制度を活用してパソコン機器や通信回線を整備し、教育研究環境を整えていた。本学に情報センターという組織が学長直轄の教育研究組織として編成された理由には、助成対象を教育・研究の用途に限る補助金制度とも関りがあったといえよう。なお、助成があるといっても経費の多くは本学予算から支出であるため、パソコン機器のリース更新の時期には、幾度も打ち合わせを重ねて、費用対効果に最も優れたリプレース計画策定にあたっていたことを、この原稿を書きながら懐かしく思い出した。

また、メールアドレスの発行も情報センターで行っていた。大学のアカデミックドメイン（@～ac.jp）でのメールアドレスを入学後に配付し、当初は在学中のみ利用が可能であったが、その後メールサーバの変更等もあり、私が情報センターを離れた後、平成25（2013）年度卒業生から卒業後も継続利用が可能となり現在に至っている。

通信技術やハード・ソフトの進化のスピードに目まぐるしさを感じる方もいる一方で、最近では、インターネット環境が整った時代に誕生した人をミレニアル世代、さらにデジタル化が当たり前となってから誕生した人をZ世代と分類することを見聞きする機会が増えた。労働市場では2025年には労働人口の約半数をこれらの世代が占めるとも言われているが、現役大学生のZ世代化は完了し、本学では2021年度入学生から一人に一台のタブレットPC貸与を開始した。このデジタル化世代のICTを担う現在の部署（情報システム管理室）は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策関連でも多くの要望に対応していて、大変なご苦労をされている。現下のコロナ禍では大きな声をだすことは憚られるので、この誌面からエールを送りたい。

（大学改革推進課長）

卒業生だより

中山幸男（信龍）氏（46文）『筆文字の文化史　書を楽しむ』を刊行

文学部中国文学科を1978（昭和53）年3月に卒業された中山幸男（信龍）さんがリンクス出版から『筆文字の文化史　書を楽しむ』を本年（2022年）1月に出版されました。本書執筆の意図を、「書写書道の現場からみた、『楽しく・わかりやすく書道文化について学ぶことのできる『うんちく教材』を作ろうと思い立ち3年をかけて作成したと述べています。

本書は第3章からなり、第1章は日本の「筆文字文化」（11話）、第2章は現代から探る「筆文字の文化史」（大和時代から江戸時代まで13話）、第3章は近代日本の「筆文字の文化史」（明治以降13話）で構成され、最後に書道便覧を付している。

中山さんは、本学卒業後埼玉県公立高等学校芸術科（書道）の教諭、教頭、校長を務められ、定年退職後は、埼玉県総合教育センター教員研修担当として勤務。埼玉県高等学校書道教育研究会元会長・顧問、埼玉県書写書道教育連盟元会長、顧問。

落語家・柳亭燕三師匠（73文）母校で公演

2005（平成17）年3月文学部中国文学科卒業の落語家柳亭燕三（りゅうていえんざ）師匠が2021（令和3）年7月17日に行われた二松学舎大学人文学会第122回大会で古典落語『蜘蛛駕籠（くもかご）』と文学部中川桂教授との対談「落語の世界」に出演されました。本年4月開設される歴史文化学科に関連した特別企画「笑いの歴史文化学」への参加でした。

柳亭燕三師匠は、本学卒業後の2005（平成17）年9月、柳亭市馬に入門。前座名は「市丸」。2009年6月21日、二ツ目昇進。「市江」と改名。2021年3月22日、真打昇進、柳亭燕三を襲名。主な持ちネタは、『熊の皮』『しの字嫌い』。

輝きをもう一度

埼玉県新座市教育長　金子廣志

教員は今、最も困難な時代を生きている。文部科学省が教員の思いを広く発信するために始めたツイッター「#教師のバトン」には、全国の教員の悲痛な叫びがつづられている。教育に対するニーズが多様化し、学習の個別化に対応できないことに起因する苦情が、学校に寄せられているのだ。その上、さまざまな業務が追い打ちをかけ、デジタルトランスフォーメーション（DX）に後れを取った職場では、紙ベース主体の効率の悪い業務が日常となっている。

教員は、子供たちの個人情報を多岐にわたって把握しているが、紙ベース故に、セキュリティーには相当気を使わねばならない。成績表を紛失したなどという事故が時々報道されるが、学校現場のDXがいかに遅れているかを物語っている。家庭に持ち帰ってまで仕事を進めなければならない教員の実態が、ここにはある。行政も管理職も「優しさ」に欠けてはいないか、この種の事故が報道されるたびに私はそう思う。

教員の不祥事はあってはならないことだが、起こったことを糾弾するだけでは何の解決にもならない。多くの善良な教員が、肩身の狭い思いをし、襲ってくる閉塞感と闘わねばならなくなっている。一番心配なのは、教員が持っている高い志と誇りが揺らぎ始めていることだ。社会的ステータスの凋落も心配だ。

欧米諸国の教員のステータスは、どの国も高い。米国は、教員の待遇が良いとは言えないが、社会的ステータスは高い。テネシー州の街を歩いている時、店の看板に「Teacher Appreciation」と書かれていた。5月（米国では学年末）は教員への感謝の月間で、教員には感謝の割引をするというのだ。さらに、保護者や子供たちは、教員に感謝の気持ちを表すため、手紙を書くという。かつて日本もこういう時代があった。教員の仕事が映画にもなり、多くの人たちの感動を呼んだ。そういう時代を取り戻さなければならないと感じている。

《本文は、時事通信社の教育紙『内外教育』2021年（令和3年）12月21日発行第6963号の冒頭エッセイ「ひとこと」に掲載されたものです。

金子廣志氏は、昭和45年3月に本学文学部卒業（38文）。卒業後同年4月から埼玉県の公立小学校の助教諭・教諭・教頭・校長を経て、平成15年4月埼玉県新座市教育委員会事務局学校教育部長（平成18年4月まで）。平成18年4月新座市教育委員会教育長に就任、現在に至る。》

会員からの便り

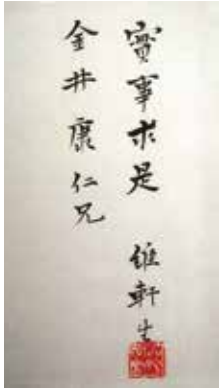
實事求是

金井　康（41文）

加藤常賢教授（学長）のことを思い出した。『漢字の起源』（初版昭和45年）出版翌月の1月22日、2階の学長室に伺い、中扉に、直筆の御詞と落款を戴いた。

實事求是　維軒生印

金井康仁兄



先生の講義は、短軀ながら覇気があった。学問を妨げるものは先入観だ、と教えられた。時折の雑談で、「史料編纂所はアカの巣窟だよ」と話された。レッドパージの話ではない。従兄が籍を置く機関でもあり、真意を量りかねた。『大日本史料』の刊行を目的とする編纂所である。当時は唯物史観盛行の頃である。巣窟か否かは別として、社会的時代的背景は否めまい。かの『大日本史』（紀伝体・漢文）も、朱子学を政事の基本に置いた幕府の影は免れない。

史料蒐集編纂の最大の障碍は特定の思想・史観に囚われること、と先生は認識されていたのだろう。年を経て、そう思う。古漢字・漢語の精密な分析により、中国の古代家族制度を究明された先生の視座はここにあった。常識や思想によるバイアスが掛かれば、真贋を見極める研究者の眼も偏る。焚書坑儒のごとき愚を招きかねない。「實事求是」こそが学問だ、と学生に伝えたかったのだろう。學而不思則罔。学問は未来世界を照らす自覚を以てせよ、ということだ。

加藤常賢博士

先生は満84歳も間近の昭和53年8月3日逝去された。9月10日大学葬が執り行われた。二松學舍での9年の課程を了えて、高校の専任として採用された年のことだった。

縁あり、校務の傍ら帰宅後は辞書執筆に関わることになった。『チャレンジ小学漢字辞典』（初版昭和60年）には執筆陣に西敏・羽柴弘両氏の名もある。今なお書店に並ぶ。

次が『簡明漢和字典』（初版平成4年）で、執筆陣に石川三佐男・家井真・井上和男・大地武雄・川久保廣衛・西敏・平光慎思郎・横須賀司久・吉崎一衛諸氏の名が並ぶ。解字は加藤常賢博士の研究成果を基とすることが方針とされた。『漢字の発掘』（初版昭和46年）と『角川字源辞典』（初版昭和47年・第二版昭和58年）も座右に置いた。私の担当は語義の執筆だったが、時代に対応すべく現代中国音（拼音）とJISコードを加える提案をした覚えがある。

実を求め、語感を磨き推敲を重ねる日々であった。

藤塚鄰博士と加藤常賢先生の一端

上久芳（44文）

地元紙『河北新報』2021年（令和3年）5月19日（水）号に〔奥州・前沢出身　中国哲学研究者　藤塚鄰の功績知って―親族が顕彰会設立へ―〕という見出しの記事が載った。そこには藤塚鄰（ちかし）の紹介と会設立の主旨が記してあった。

「藤塚は奥州市前沢の佐々木家に生まれ、塩釜神社（塩釜市）の神職藤塚家の養子となった。第二高等学校（旧制二高・現東北大）を卒業後、東京帝大で中国哲学を専攻した。

日本統治下にあった京城（現在のソウル）の京城帝大で教授を務め、昭和天皇に漢書を進講したこともあった。

京城帝大時代は現地の書画の芸術的価値を高く評価し、収集した。後に韓国の国宝となる絵画「歳寒図」（金正喜作）を東京に持ち帰り、1944年に韓国側に無償で譲った逸話が残る。このことから近年、韓国で再評価されている。

藤塚鄰博士

戦争末期には前沢に疎開しており、「歳寒図」の複製品や「素軒」の号による自らの書などを親戚宅に残している。大東文化学院（現大東文化大）の総長だった。69歳で死去した。」とあり、藤塚の姉のやしゃごに当たる高橋竜太郎さん（62）が顕彰会の発起人代表となり、資料や話を集めたいとしている。

私はこれを読んですぐ頭に浮んだのが『論語総説』の加藤常賢先生の序と、嗣子明直氏の後記である。序には、

1、『論語』は博士が一生を通じて究められたものであったこと。

2、その学問は清朝考証学の「実事求是」の実証的精神であり、空疎な虚説を排斥されたこと。

3、そのため、既存文献の蒐集は膨大なものであったこと。

4、加藤先生は博士に親炙し、眷顧を蒙ること多年であり、博士に研究成果をまとめて発表されることを熱願したが、完璧を期されたために、簡単に著述を了解されなかったこと。

5、昭和23年（1948年）、弘文

堂の奨めによって出版を決意されたが、初夏、病（胃癌だったという）を得、嗣子の助けによって校正に従事なされたが、病、日に日に重くなり、校了を待たずして12月24日に亡くなられたこと。

要約すれば以上であるが、嗣子の後記には、博士は、12月中旬重体に陥るに及んで、直ちに校正の続行と序文を加藤先生に依頼することを告げ、臨終の日に加藤先生はその然諾を藤塚博士に伝えられたとある。かくして、昭和24年（1949年）の3月21日、嗣子明直氏が後記を書き、5月15日に初版発行をみたのである。

『論語総説』にはこのようなドラマがあり、私は胸を熱くされるのである。

因みに、藤塚博士は大正15年（1926年）京城帝大教授に就任、加藤先生は昭和3年（1928年）同大助教授として着任し、その2年後、昭和5年（1930年）北京に留学されているので、京城帝大では2年間ご一緒されたことになる。また、藤塚博士の雅号が新聞記事にもある通り「素軒」なのに対して加藤先生は「維軒」であり、これは清朝学者の王国維から採ったものであることはよく知られているところである。

河北新報の記事に触発され、以上のことをここに記してみたのである。

（尚、藤塚博士写真と記事の一部引用は河北新報社許諾済）

「学恩」のみちびき

小金澤　豊（50文）

「学恩」という言葉は、いつのころから使われだしたのであろうか。

『広辞苑』には「学問上の教えを受けた恩恵」とあるものの、『大漢和』にも『日本国語大辞典（第一版）』にも見あたらない。

学部在籍当時は中国語文研究会に属し、また、野村邦近先生のゼミ一期生として、中国語を中心に生活が回っていた。この4年間の蓄積が、2年前に定年を迎えるまで埼玉県公立中学に奉職し、現在も再任用を続ける中で、どれほど拠り所となったものであろうか。

不惑の時分には、勤務時間終了を待ちながら大学院の前後期課程へ5年間通学。石川忠久先生や佐藤保先生などの薫陶を受け、研究活動のいろはの階梯に導いていただくことがかなった。再来した学生気分に高揚しつつも、学校現場との両立に、時間的にも、精神的にも、多大な労力を費やしたことを思い出す。ちょうど大学を挙げてCOEプログラム事業に取り組んでいる時期で、漢文教育研究班に携わる機会を得たことを記憶している。

現在の勤務地である八潮市は、生涯学習宣言都市の側面を持つ。この地で社会人対象の論語講座と漢詩講座を開講。学校勤務と並行しながらのこれらの講座は、すでに10年以上継続し、常連の受講生の方も多々いらっしゃり、その学ぶ姿勢からは、却って私の方が、生き方を教えられ、大いに刺激されている。

他方では、全国漢文教育学会に所属し、昨年からは常任理事として現職の先生方への研修会等の企画運営に携わっている。学会編として出した児童生徒向け入門書『はじめてであう論語』『声に出そうはじめての漢詩』『知っておきたい教科書に出てくる故事成語』（いずれも汐文社）の執筆に関われたことも、有り難い。

単著の近刊としては『子どもたちに詩の心を伝える講話』（学事出版）を4年前に上梓。若手教員たちへの支援の一助となることを願いたい。

昨年来、思いがけずも野村ゼミのオンライン同窓会が発足し、国内はもとより、アジア各地に駐在する同窓たちも交えての旧交を温められていることが、何とも嬉しく、そして頼もしく感じられる。

「学恩」とは、まことに際限のないものである。

コロナ禍で変わったこと

富田貴広（65政）

私が1997年に大学を卒業して24年がたちました。現在は株式会社久世に勤務しており、採用活動を含めて人事全般の業務に従事しております。

大学在学中は、学業より、サークル活動とアルバイト中心の生活を送っておりました。現在は学生を採用する立場となりましたが、当時は就職活動もほとんどおこなわず、特別養護老人ホームへ事務職員として入職いたしました。約9年総務、経理、人事労務を担当し、その後、ドラッグストアに転職し採用業務に携わり、約5年前に現在の株式会社久世に入社いたしました。従って採用業務には通算10年以上従事しております。現在の会社に入社してから、大学のキャリアセンターにご挨拶に訪問し、伺うようになりました。それ以降、大学の会社説明会や、キャリアセンター主催の二松学舎大学卒業生採用担当者研究交流会に参加させていただいております。私は大学生活中、就職活動をほとんど行っていないため。キャリアセンターに行ったことがなかったので、現在の状況は不思議な感じがしております。

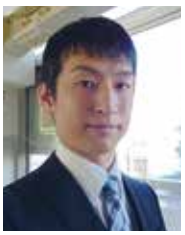
ここ数年新型コロナウイルス感染症の影響で新卒採用の状況や会社の状況が大きく変わりました。採用活動は、オンライン化が進み、仕事についてもテレワークといったデジタル化が進み、大きく変化いたしました。私生活においては、あまり外出ができない状況の中で身体を動かすようにと思い、自転車に乗ったり、ハイキングに行ったりと野外活動を

行うようになりました。特に3年位前に健康管理の一環として行い始めたランニングは、週1回必ず行っております。コロナが出る前に、地元のマラソン大会にも参加しました。コロナの感染拡大で大会自体が行われていないのですが、次に参加した際には、ハーフマラソン目標タイムの1時間30分以内で完走できるように練習をしています。

コロナウイルス感染症の影響がまだまだあります。私自身もコロナウイルス感染症の影響でマイナスのことも多くありましたが、プラスのこともありました。いままで、仕事中心の生活が、プライベートと両立させることができました。今後も、仕事もプライベートも共に充実させていきたいと思います。

令和3年度子供の読書活動優秀実践校文部科学大臣表彰

久保善啓（74文）



本年度、私の勤める千葉県立浦安高等学校が標記の表彰を受けました。活動内容は、国語総合という科目を4単位から5単位に増加させて、毎週一回、必ず図書館で、学ぶ技術を向上させるための授業を行うというものです。

なぜ、このような活動を始めようと考えたのかというと、それは人は社会に出た時に、自身の力で学び、社会と共に成長する必要があり、そこには科学があると考えたからです。

このように考えるようになったきっかけは、JICA海外協力隊に参加した経験が元になっています。現在の勤務校に赴任する前、現職教員参加制度を活用して、約2年間、中央アジアにあるキルギス共和国で教育活動に携わりました。この経験から、日本の学校教育は普遍的なものではなく、あくまで日本の形であることに改めて気付きました。そして、意識の有無に関わらず未来は今この時に生きている私たちが作っているのだと強く感じました。私が創りたい未来は、人々がそれぞれの強みを生かし、次の未来を創るという循環が生まれる未来です。そのためには、社会で各人が先人の残したものを理解し、自身の強みを発揮するために学ぶことが必要だと考えました。そのために、書籍を活用すること、図書館を活用することが必要であり、科学があることに辿り着きました。

今回の表彰で、重要なことは、組織として表彰を受けたことだと考えています。教育が発展するにつれて、高度化、細分化が起こります。より良い教育活動を実現するためには、教育者が連携し、組織的に対応すること、マネジメントが必要です。

この組織的に対応するための技術を得るために、働きながらグロービス経営大学院の修士課程で経営管理を学びました。今回の表彰された取組を通し、使い方と場面を見極めれば、科学は役立つと実感しました。

二松學舍大学の卒業生は教育業界で活躍している方々や教育に関心のある方が多いと思います。是非、一緒に教育で明るく楽しい社会を創っていきましょう。

少年の日の夢は続く…

佐藤恵一（83文）

2015年3月に卒業し、全日本プロレスに入門、デビュー。今年で7年目（今はフリーランスのプロレスラーです）。

二松學舍からプロレス？　と少しでも興味を持ってくれたら嬉しいです。何を書こうかと模索したのですが、格好つけた事は書けないので、今日までどんな生活をしてきたか、素直に思っている事をそのまま書いていこうと思います。

プロレスラーになろうと思ったのは小学3年生の頃。周りの友達が戦隊モノやカードゲームにハマっていた頃、プロレスラーは私にとってのヒーローでした。1歳の頃から水泳を12年間、小学校から高校までは野球を12年間。学生当時はやっている競技で将来は…と意気込んでいたものの。気付けば小学校の卒業文集に、将来はプロレスラーになって有名になって…みたいな事を書いていました。当時私の夢を笑っていた同級生や大人達が今の私を見てどう思うか、非常に興味があります。まあここが今生きるモチベーションであったりします。小学生だった少年佐藤恵一もそんな人らに心底腹が立っていたと、今でも深く覚えています（笑）。

私よりも上の世代の方ならプロレスがどんなものかご存知の方も多いのではないでしょうか。所謂昭和のプロレスのイメージを持たれている方には特に。また、触れたことのない方には今のプロレス、一度見ていただきたい。私自身、見ていたプロレスと、実際に生業にするプロレス、考えが真逆になりました。決して安くないチケットを買って頂いて、会場に足を運んでくださるお客様がいて、我々は明日を生きています。そのお客様の為に一瞬一秒その瞬間に何ができるのか、知れば知るほどやめられない、シンプルな言葉を使いますが、楽しいです。

昨年夏、試合中に脛骨を折る怪我をして手術しましたが、まだまだ突き詰めていきたい職業です。

昨年は母校の正則学園高校の体育館にリングを作り、生徒達にプロレスを見てもらいました（YouTubeにアーカイブが乗っているので是非）。リングから見た生徒達のあの目に感動。

これを読んでくださった皆様にも

自信を持ってお届けしたいなあ。そんな機会を何方か作りませんか？なんて言ってみたり。

私の今の夢や、皆様に伝えたいこと、ほんの一部しか伝えられませんでした。近況はInstagram（@keiichiofficial）に載せています。この続きがまたどこかである事を願いまして、締めさせていただきます。

どんな状況も「楽しむ」

飛田佳於里（86文）

私は2018年に卒業し、現在、タニコー株式会社に勤務しております。この会社は、飲食店やホテルなど「食」を提供する場所に存在する業務用の厨房機器を、製造から販売メンテナンスまでトータルサポートしている会社です。新卒入社から現在まで人事部にて働いています。現在、主に新卒採用の業務を行っておりますので、二松學舍大学に関わる機会は多くありました。コロナ禍になり、現在はオンラインにて説明会やNEW（卒業生採用担当者研究交流会）で交流する場面が多く、縁あって今回もこの会報に寄稿する運びとなりました。今回の寄稿にあたり何を書こうか悩みました。考えた結果、勤務して4年が経過しようとしておりますが、振り返る機会は中々なかったので大学生活から入社し現在に至るまで、簡単に振り返ってみたいと思います。

文学部へ入学し、3年生からは近現代のゼミナールを専攻、「食べることが好き」という理由で当社のインターンシップにも参加しました。4年生では教育実習へ行きました。当時は映画やドラマ、演劇、音楽等が好きだった為、教員ではなくエンタメ関連の仕事に就きたいなと漠然とした思いがありました。しかし、教育実習・就職活動を通し、趣味と仕事は別にしたいという想いが芽生え、インターンシップで参加した当社を思い出し入社試験に臨みました。社内の雰囲気の良さに惹かれたことがきっかけで、気付けば入社して今ではインターンシップ生を受け入れる側として活動しています。大学で学んだ言葉の力を今の新卒採用で活かせていると実感していますし、趣味と仕事を両立しながら過ごすことが出来ています。

大学時代、楽しむことをモットーに様々なことにチャレンジできたなと思います。就職活動は悩んだけれど、大学時代に選択した道は正しかったと今の私が証明している気がします。今回このような機会を頂き振り返ることが出来ました。ありがとうございます。コロナ禍で限られた日々が続きますが「楽しむ」気持ちを忘れず、日々の業務やプライベートを楽しく過ごしていきたいです。

東京オリンピックボランティア参加

宮下凌輔（89文）

卒業してからまだ一年ほどしか経っていないのが信じられないほど、社会の荒波にもまれています。第89期卒業生の宮下です。現在は国語科の教員として働いております。

さて、今年も北京で行われるオリンピックで盛り上がっていることですが、昨年の東京オリンピックも記憶に新しいことでしょう。せっかくの機会、ということで実は私、ボランティアとして参加しておりました。担当会場はビーチバレー会場でした。今まで縁のない競技であったため、炎天下に砂浜に立たされたらどうしようとくだらない不安を抱えておりましたが、杞憂に終わり、会場運営の中枢で活動しておりました。誰もいない観客席に響く選手の叫び声（？）と、弁当の塩辛さが非常に印象深く残っています。現在も続く（この会報がお手元に届くころには落ち着いていることを願いますが……）コロナの影響で、運営に関しては賛否両論あったとは存じますが、身をもって体験したうえで言わせていただくのであれば、良い経験が出来た、の一言に尽きます。ボランティアの辞退も多く、世間の目は冷たい印象を受けましたが、何にでも噛みつく人間が目立った結果かと思います。

会場は物理的な熱と精神的な熱で満ちており、口々に「ここに観客がいたらな」と複雑な愚痴をこぼすのを私もまた複雑な気持ちで聞いておりました。

とくにこれと言ってオチはありませんが、社会人一年目として漠然と思ったことを綴ります。この会報を読まれる方は様々な年代の方がいらっしゃると思いますが、特に今年卒業される方々へ。偉そうに申し上げるのは、コロナで様々な愉快な催しが潰え、大学生活のほとんどを乾燥した流れで過ごされてきたとは思いますが、卑屈にならずに生きて欲しいと願っています。不満が溜まる世の中ではありますが、ぜひ色々試してみて、やってみることでわかる楽しさを味わっていただければと思います。結局は、素直に楽しんでいる人が一番得をしているのかもしれません。自分の素直さを誇りに思っています。では良い旅を。

北から南から（支部報からの再掲）

明珠在掌（みょうじゅ たなごころにあり）

渡邊慈江（45文）

昨今のコロナ禍は、身心に多くのストレスを抱えることとなった。私たちはそのような環境下で、どのように考え、どのように生きていけばよいのだろうか。

そこで、私は原稿のタイトルを「明珠掌に在り」にしてみたいと考えた。

「明珠」とは、計り知れないほど価値のある宝をいう。

「掌に在り」とは、自分がその宝をもう既に持っている。自分の掌にあるのだから探さなくても良いということだ。

前述のように、私たちは眉間にシワを寄せて「コロナ禍であれもできない、これもダメ。ストレス、ストレス」と嘆いている。もちろん、それが現実であるから、仕方のないことだろう。

だが、そんな自分を一旦俯瞰してみると、自分の望み通りにならないことばかりに身心を翻弄されて、「大切な宝はどこだ」「ここにはないんじゃないか」と、宝が遠くにあるように思い、探し回っているように思う。

宝は、もう自分が掴んでいるのである。「今、息をしている」「今、手が動く足が動く」。私たちは、かけがえのない一日を与えられ、一時を生き、一瞬を享受し、一刹那を精いっぱい呼吸している。この事実を、当たり前と思うか。「明珠」と気づくか。

そこで、私はこう思うのである。

この一瞬、この一時、この一刹那を、命いっぱいに生きてみようと、大声で自分に言ってみたらどうだろう。

自分という「明珠」を使い切るのだと、自分に「宣言」して、生きてみたらどうだろう。

自分自身が、「明珠」そのものなのだ。

自分がどんなに素晴らしい宝「明珠」なのかに、気づかなくてどうするのだと。

そのことに、どうか気づいてほしい。

そして、このコロナ禍を、皆さまが心穏やかにと願っている。

実は私は10年前に出家し、今は富山の田園地域にある寺「梅香寺」の住職をしている。

家族は神奈川県におり、出家するまで鍼灸専門学校で講師をしていた。その後、駒澤大学に社会人入学をし大学院に進み、博士後期課程を卒業。仏教学の博士号を取得して駒澤大学の非常勤講師になった。家庭と仕事、また研究等々は順調で、経済的にも申し分なかった。

ところが、縁あって住職になった梅香寺は小さな尼寺で檀家がなく、収入はほとんどない。時々、頼まれてお経を読みに伺いお布施をいただく。月に3万円ほどが収入で、その中から生活費や光熱費を引いたら何も残らない。

夏はいただきものの茄子・胡瓜・トマト。冬は大根・白菜。これが夏冬永遠と続く。お金がないから買い物をしない。いただきものだけという生活になった。

先日、坐禅をしていたら、ふと、こんなことを思って一人ほくそ笑んでしまった。

「明珠」ねえ。

あのばあちゃんがくれた茄子のことかな。

（『松苓会神奈川県支部報』第41号より）

大学附属図書館掲示板で紹介された卒業生の著作

①安岡定子（53文）著『渋沢栄一と安岡正篤で読み解く語る論語』（ブレジデント社）

②大黒みほ（58文）再話『さるじぞう』（あすなろ書房）

③七沢ゆきの（72文）著『江戸の花魁と入れ替わったので花街の頂点を目指してみる・二』（富士見L文庫）

④深澤賢治（37文）著『陽明学のすすめⅧ　人間学講和　中江藤樹』（明徳出版社）

⑤阿部誠文（36文　文修3）著『釈考「源氏物語」全短歌第1巻』（花書院）

⑥辰巳正明（36文　文修3）著『懐風藻全注釈　新訂増補版』（花鳥風月社）

学生会員だより

今後の学生会について

学生会長　水口愛子

こんにちは。昨年に引き続き学生会執行委員会 会長を務めさせていただいております、文学部国文学科2年の水口愛子と申します。よろしくお願いいたします。

昨年は新型コロナウイルスの影響により、新入生歓迎式典や創縁祭は本学初のオンライン開催となりました。「オンラインで新入生歓迎式典や創縁祭を行う」という難題に私たちは何回も話し合いを行い、試行錯誤しながら開催に向けて準備を進めてまいりました。

当日、急なアクシデント等に対応してくれた役員たちのおかげで、新入生歓迎式典や創縁祭のオンライン開催を無事に終わらせることができたと思います。この場をお借りして、お礼申し上げます。

また昨年、新入生歓迎式典や九段祭ＰＯＰ、創縁祭に関与していただいた皆様に心よりお礼を申し上げたいと思います。

今年は私たち2年生が学生会の最高学年となり、新入生歓迎式典や九段祭ＰＯＰ、創縁祭を行う予定です。新型コロナウイルスの感染状況により対面での開催が可能か、昨年に引き続きオンライン開催になるか現段階ではまだわかりませんが、私たち学生会執行委員会役員一同、対面での開催を強く希望しております。

新型コロナウイルスの影響で、今までの新入生歓迎式典や創縁祭を再現することは難しいと思います。しかし、私たちはそのことをマイナスに捉えません。むしろ、自分たちの手で新しい『新入生歓迎式典』や『九段祭ＰＯＰ』、『創縁祭』を作っていけることに期待を膨らませております。今年の学生会が運営する行事へのご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

1月に3年生が引退し、私たち2年生が学生会執行委員会の最高学年となりました。至らぬ点も多々あると思いますが、今後の学生会の運営等へのご理解とご協力、何卒よろしくお願いいたします。

（文学部国文学科　2年）

創縁祭2021を終えて

平野由佳

昨年10月31日と11月1日の2日間にわたり、創縁祭を開催いたしました。今回の創縁祭は「学校で結ばれる縁、ネットワークを通して結ばれる縁、様々な縁が巡り巡って多くの人に良い縁が結ばれる創縁祭に」というコンセプトで「巡縁」をテーマに掲げました。何事もリモート、オンラインと言われるようになった昨今、希薄になりがちな縁に焦点を当てた創縁祭となりました。

新型コロナウイルスの感染状況を見ながら、時間の許す限り検討し対策もしてきましたが、大学に来場していただくことは叶わず、オンラインでの開催となりました。対面で開催したかった、来場していただきたかったという悔いがないわけではありませんが、どうにか対面での開催ができる道はないだろうか、安全に感染者を出さずに運営するために何ができるのかと考えた時間や内容は今後のイベント運営に生かすことができると、前向きな思いでいます。

参加してくださった団体の皆さんも我々も、オンライン開催にしかない苦労を重ねただけでなく、対面で行う場合の準備も同時に行うなど、今までにない課題がありましたが、大きな問題がなく終えられたと思います。２０２０年はこの時期に創縁祭ではなく新入生歓迎式典を開催していたため、創縁祭としては2年ぶりの開催となった上に今までとは違う開催方法でしたが、成功を収めることができたというのは大きな収穫

です。もちろん、何も改善すべき点が見つからないほど完璧だったわけではありません。改善できる点はありますし、何よりも対面での開催をやはり目指していきたいというのが大きな目標で、これからまだまだ努力が必要かと思います。

多くの方にご覧いただき、楽しんでいただいたオンライン開催の創縁祭を糧に、今後のイベント運営に精進していく所存です。今後ともよろしくお願いいたします。

（文学部国文学科　2年）

サークル紹介

国語教育研究会

神戸ひこ

私たち国語教育研究会は現在4年生9名、3年生5名、2年生6名、1年生5名の計25名で小・中・高（主に中・高）の教員になるために、模擬授業などの活動を週に2日行っているサークルです。主な活動内容は、前述した通り模擬授業ですが、模擬授業を行う為に必要な指導案の作成等も行っています。指導案の作成がわからない方でも先輩が一から丁寧に説明をしながら作成をしていくため、安心して活動を行う事が出来ます。

通常活動の他に夏と秋に行われる主な活動としては、新型コロナウイルス流行前は夏に、合宿や寺子屋などを実施していました。寺子屋とは、二松学舎大学附属柏高等学校

まで行き、小学1～6年生に読書感想文の書き方を教える活動です。合宿では、1～3年生全員が一人1回模擬授業を行い、実際に大学の先生方がお越しくださり、講評いただきました。空いた時間で球技大会をサークルのメンバー全員で行い、チーム対抗で戦ったり、夜にはバーベキューを行ったりもしていました。このように、夏合宿では2泊3日の日程を通して通常の活動よりもさらに多くの時間を使用して実践活動の他に、部員同士の仲を深めることのできる活動を行います。

夏と同じく新型コロナウイルス流行前に、秋の活動は、学園祭への模擬店の出店をします。模擬店では、フランクフルトを売りました。焼いて売るだけでなく、準備日には、皆で呼び込みのポスターや看板作りなどを行い、普段の活動では知ることのできない部員の新たな一面などを知るきっかけとなります。また、例年10月下旬頃に教育実習報告会が行われます。これは、国語教育研究会の4年生の方々が部員限定で教育実習を終えて学んだことを報告してくださいます。この報告会は非常に参考になるため是非、国語教育研究会に入部して聴く事をおすすめします。

このように、国語教育研究会は、教員を目指している方はもちろん免許だけの取得のつもりだけど、実習に不安がある方にも最適な活動を行っているサークルです。

（文学部国文学科　3年）

劇団こんにちはシアター

太田咲輝

皆様、こんにシア！　寒い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか。私たちはと言うと、なかなか慌しくも活気ある1年を過ごしておりました。本稿では、そんな1年間の活動内容について、少しばかりお話しさせて頂こうと思います。

春、出会いと別れの季節。と、よく言われますが、こんシアにはなんと1年生が17人、2年生が3人入部してくれました。計20人ですよ！20人！

個性豊かな新入部員を迎えて始まったPOP祭は『シアワセの鏡』と『有意義な休日』の二本立てでした。シリアスな展開の作品と、ゴリゴリのコメディ作品ということで、幅広い方々に受け入れて頂ける、飽きない公演になっていたと思います。無事成功を収められたのは、新生こんシアとして良いスタートを切れたと言えるでしょう。

夏。夏と言えば合宿！！　今年は草津へ……行けませんでした。自粛です。その鬱憤を晴らすが如く始まったのは、創縁祭公演『割れた茶碗に注いでみる』の稽古でした。SFコメディの本作はPOP祭と違い、上級生も加わった熾烈なオーディションとなりました。それを勝ち抜いた役者たちの魅力的な演技と、スタッフによる手の込んだ衣装、美術には注目です。（YouTubeで見られます。）

そこから間髪入れずに冬公演の準備が始まりました。今年初めての学外公演は、POP祭と同じく二本立てで、『ガールズバー狂奔劇』と『なつゆき』の上演でした。雰囲気が良好なまま、二座組が互いに質を高め合える関係性を築けたことは、部員の絆をさらに深めるきっかけになったと思います。（これまたYouTubeで見られます。）

今は正月ボケの体に鞭打って、差し迫る課題と卒業公演（3月12・13日に上演予定！　ぜひお楽しみに！）に向けて頑張っている最中です。全く活動が出来なかった昨年を思うと、今年はどんな形であれ演劇

が出来ることへの喜びと楽しさをひしひしと感じる一年でした。大勢で力を合わせて一つのものを創作する。なんて素晴らしいことでしょう。しかし演劇は、観客がいなければ成り立ちません。生で観てくれる方々の前で、また公演ができますように、心から願っています。

（文学部国文学科　3年）

学生の活躍

『週刊読書人』に書評

2019年度から始まった「書評キャンパス」が今年度も行われ、本学学生7人の書評が『週刊読書人』新聞に掲載されました。

○『週刊読書人』8月27日号
福留　舞さん（国文学科2年）
山田明著『キャプテン　君はなにかができる』

○同9月3日号
東　蒼大さん（国文学科4年）
宇佐見りん著『推し、燃ゆ』

○同9月10日号
中野愛梨沙さん（国文学科4年）
村田沙耶香著『地球星人』

○同9月17日号
大澤悠乃さん（国文学科2年）
萩原慎一郎著『歌集　滑走路』

○同10月15日号
横山史奈さん（国文学科2年）
ソン・ウォンピョン著『アーモンド』

○同10月22日号
瀬戸咲良さん（国文学科1年）
葉室麟著『蜩ノ記』

○同11月5日号
佐藤みゆさん（国文学科3年）
寺地はるな著『わたしの良い子』

表紙写真募集

募集対象者	二松学舎大学学部在学生
募集写真	年2回発行（9月と3月）の松苓会報表紙掲載写真 会報表紙にふさわしいもの。ジャンルは問いません。
募集期間	9月発行号は8月末日、3月号は1月末日を締切日とします。
応募点数	各号とも一人1点
応募方法	写真データ送信先メールアドレスに、件名「松苓会報の表紙写真応募」と入力し、応募者の氏名、学年、学科、連絡先（電話番号）と写真の簡単な説明（撮影場所等を含む）を明記し、「写真データ」を添えて送信してください。

＊応募写真は未発表のものに限ります。
＊応募写真は応募者本人のみに全ての権利（著作権を含みます）があるオリジナル作品に限ります。
＊掲載写真撮影者には、記念品をお贈りします。
＊作品の選考・掲載に関する問い合わせは受け付けません。あらかじめご了承ください。
＊注意事項等詳細は、別途「募集要項」（学内メールで通知）で確認してください。
＊送信先　E-mail　shourei@nishogakusha-u.ac.jp

改革する松苓会　**募　集**　松苓会本部応援団

本部業務のお手伝いをお願いします。

〈事務、会報づくり、各種イベントや活動等の業務〉
ボランティアで交通費は支給
同窓会活動に、興味・意欲のある方は、お問い合わせ下さい。

問合せ先：松苓会事務局　〒102-8336　東京都千代田区三番町6-16
TEL　03-3261-7408／FAX　03-3261-8914／E-mail　shourei@nishogakusha-u.ac.jp

松苓会本部の活動状況

令和3年度第4回常任幹事会

日時　12月4日（土）13時30分
会場　大学九段3号館3071教室
参加者14人（内リモート出席3人）

議題
1　令和3年度予算の執行状況
2　松苓会改革部会の報告等
3　松苓会報第67号について
4　卒業記念品・入学記念品について
5　附属高校野球部の甲子園大会出場対応について

報告事項
1　令和3年度ホームカミングデー
2　支部活動・母校支援活動
3　支部長交代
4　その他

関東地区の地区幹事交代

令和4年2月10日付
新　髙柳　薫（群馬県支部長）
前　矢澤喜成（東京都支部長）

メールアドレス登録に向けて

現在、松苓会活動の改革を推進していますが、中でも会議や連絡手段などのデジタル化は最重要課題です。すでに本部三役会、常任幹事会はリモート化し、各支部へも拡大する取り組みを行っています。最近の卒業生には、入学時に大学から付与されたメールアドレスを卒業後も連絡手段として利用することを伝えています。今後は会員個々にも直接連絡ができるネットワークの構築をめざします。

第90期同期会結成説明会開催

令和4年2月25日（金）、今年度卒業生対象の説明会をリモート対応で開催した。参加者は30人（内学生22人）。

説明会は、廣田松苓会会長の挨拶に続き、第90回同期会運営要領の説明があり、了承の後、今日の参加者が幹事となることを確認し、意見交換した。

同期会運営要領の概要は次のとおり。

名称は、二松學舍松苓会第90期同期会とする。同期生相互の親睦・連携を図り、母校二松學舍大学の発展を支援することを目的とする。

同期会の会員は、令和3年度（2021年度）に二松學舍大学文学部及び国際政治経済学部を卒業した者。当面、連絡事務所を母校内の二松學舍松苓会本部に置く。

運営は、同期会幹事を10～15人位置き、その中から、代表幹事、副代表幹事各1人選出する。同期会の運営は、代表幹事、副代表幹事、及び幹事による役員会（幹事会）を以て行う。役員会は、原則として年1回以上開催する。幹事の任期は5年とし、代表幹事、副代表幹事の任期は2年とする。幹事は、会員の動向を把握し、松苓会本部や支部・同期生との連携を図る。

最初の同期会は、当面、卒業5年後（令和9年　2027年）に開催することを目標とする。

第94回選抜高等学校野球大会

祝 センバツ出場　二松學舍大学附属高等学校

昨年夏の大会に3年ぶり4度目の出場を果たした附属高校野球部は、3月18日開幕の第94回選抜高等学校野球大会に春夏連続で出場する。選抜大会出場は7年ぶり6回目。昭和57年の第54回大会では準優勝している。

同校野球部は、昨年の秋季東京都大会決勝で国学院久我山と対戦、惜しくも9回逆転負けを喫するも準優勝。その活躍ぶりが評価されて関東・東京地区の6校目に選ばれての選抜出場。同校野球部の選抜大会での活躍が期待されます。ご声援をお願いします。

松苓会では、昨夏同様、同校野球部の活躍を支援するため、松苓会長が支援委員会のメンバーに加わります。

また、支援募金（1口5千円。3月31日まで受付）にご協力くださる方は、次の方法でご寄付いただければ幸いです。なお、この寄付金は、二松学舎教育研究振興資金として税制上の優遇措置を受けることができます。

1．インターネットを利用した寄付

スマートフォン等で、以下のURLまたはQRコードを読み取りご寄付いただけます。

画面上「インターネットによるお申込はこちら」をクリックしていただきお手続きしてください。

【URL】
https://www.nishogakusha-u.ac.jp/houjin/fund/index.html

【QRコード】

2．払込取扱票を利用した寄付

払込取扱票のご利用によるご寄付をご希望の方は、恐れ入りますが、一度松苓会本部までご連絡ください。

「人材バンク」登録募集

あなたの力で、会員や大学を応援してください

会員（含学生）の求める機会に、会員の皆さまの智恵や技能を提供していただく事業を立ち上げました。登録をお願いします。

内　容　講義・講話・講演・指導などの講師
ボランティアを基本とし、必要経費は主催者と相談により決定

登録方法
1　松苓会事務局に、メールで「人材バンク登録票の送信」を請求
2　登録票と要項をデータで受け取る
3　登録票に入力してメール添付にて返送（実践例があれば添付）

登録申請・問い合わせ先　松苓会事務局　〒102-8336　東京都千代田区三番町6-16
TEL　03-3261-7408／FAX　03-3261-8914／E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp

寄付者芳名

令和3年2月1日から令和4年1月末日までにご寄付いただいた方のご芳名を掲載します。（敬称略）
たくさんの方のご協力に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。
（一口千円）

五十口
佐々木正清 在学中
三十口
植松　永雄 31文
重田　佳子 38文
町田　哲夫 42文
二十三・一三三口
国際政治経済学部卒業生有志一同
二十口
佐藤　修 41文
奥澤　博行 51文
十口
小田　和磨 17専
沖山　吉和 36文
大森　智子 37文
吉野惠津子 37文
深澤　賢治 37文
小林　公雄 38文
廣田　克己 38文
髙橋　邦夫 39文
伊藤　文子 39文
持丸　すい 40文
黒沢　敬二 41文
三浦　　基 41文
宮下　宗樹 43文
飯田えり子 43文
鈴木　美帆 48文
佐賀　敦司 49文
青山　幸雄 49文
長澤　悟江 50文
中野　彰子 54文修
奥澤　博行 57文
張　　明輝 5文博
沢登　幸治 67政
藪崎　久雄 71政
畑野　夏未 75文
細川　直吉 76文
髙橋　慎一 89政
溝口　貞彦
名誉教授
五口
藤田　佳應 24文
平岡才二郎 26文
久保田尉世 35文
山本　武司 37文
小林　政明 39文
桜井あけみ 42文
森　留美子 43文
坂本　和彦 47文
柴田　浩二 52文
丸山　諭 52文
吉永亜理子 52文
畑　映子 53文
丸山　裕 57文
川俣　茂 63文
相良　恭子 69文
神戸　高弘 75文
雨海　洋二 77政
牛田真由佳 88文
三口
河本　岡文 26文
中村　良子 44文
小林由里子 47文
斉藤　賢康 49文
田辺　俊建 50文
黒川　淳 60文
渡邉美由紀 70文
星野　正貴 77政
滝口　明子 77文
行木　詞子 80政
伊藤　千晶 88文
二口
須藤　侑二 17専
M　N 38文
吉岡　富子 38文
堀部　忠次 40文
清水　登 42文
数見　等 43文
中村　生子 44文
荒井　俊郎 54文
石渡　康子 55文
中沼美智子 57文
福田　芳正 65政
中野　博之 73文
清水　広介 74政
小笠原圭亮 75文
服部　泰樹 77文
皆川　典子 80文
一口
長野　泰雄 38文
本間祺一郎 38文
佐藤　寛 38文
岩澤　静雄 43文
久保　榮子 46文
久保　文雄 46文
沢　　隆彦 51文
斉藤ゆかり 51文
岩原　伸 52文
小熊　隆 53文
關谷　庸子 56文
吹原　礼憲 63文
渡辺　大雄 65文
宮本美恵子 68文
中本　雄希 79文
近藤　桂 87政
内桶　朗秀 89政

平成13年度以前の卒業生の方へ
終身会員手続きのお願い

松苓会の運営資金は、ほとんどが終身会員の会費で賄われています。終身会費1万円を納入していただくと終身会員になり、会報の毎回送付やホームカミングデーの案内が毎年届くようになります。終身会員の手続きをとられるようお願いします。

表紙写真

今号の表紙写真は、文学部２年の平野由佳さんの作品です。ご本人から、「2021年はほとんど登校できずに終わりましたが、今年は何とか登校して授業を受けることができ、大学周辺の四季折々の風景を楽しむことができました。そんな喜びがこの写真から伝われば幸いです。」という、コメントをいただきました。

編集後記

コロナ禍にかかわらず寄稿頂きありがとうございます。3年目に入った自粛生活を真摯に受け止めて、社会と切り結ぶことが求められています。編集子も先日「陽性」となり、座敷牢ならぬ隔離療養を経験しました。家族のありがたみが身に染みました。

今年は創立145周年。4月には文学部に歴史文化学科が誕生します。

新たな伝統を見守り、皆で支えていきたいものです。

二松學舍松苓会報 No.67

創　　刊　昭和62年12月1日
発　　行　令和4年3月16日
編　　集　二松學舍松苓会
住　　所　〒102-8336
東京都千代田区三番町6-16
電　　話　03-3261-7408　FAX　03-3261-8914
振替口座　00180-5-160343（郵便局払込取扱票）
印　　刷　㈱サンセイ

二松學舍大学（松苓会）
ホームページ　www.nishogakusha-u.ac.jp
松苓会 E-mail　shourei@nishogakusha-u.ac.jp